

一匹の猫



わが家には二匹の猫がいる。いずれも東京生まれで、鹿児島への転居に伴って連れて来たものである。というところが高価な猫を想像されそうだが、実は一匹とも同じ野良猫の子で兄妹なのだ。しかし全く別の種のように似ていない。

平成五年の夏の夕方、呼び鈴に出てみると隣家のおばあさんが、小さな箱を持って立っている。

「一寸見て下さい。今庭先にこれが落ちていたんですよ。どついたらいいでしょうね」

と玄関先でそっと箱の蓋を開ける。中を覗くと、二十口瓢箪ほどの、黒い生まれたばかりと思われる子猫である。目は開かず声も出さない。これは四、五時間ほどの命だと思った。

「まあ、可哀相に。長くは生きないでしょうね。死ん

だら子供たちに庭に埋めさせましょう。置いて行ってもいいですよ」

と私は気安く言った。わが家の子供たちは動物好きで、特に長男は小さいころよく子猫を拾って来て、庭隅に育ため猫の墓を作らされたものだった。

いつの間にか大学一年生の三男が、薬屋から子猫用のミルクと小さな哺乳瓶を買って来ていた。片手に子猫を握って気長に哺乳瓶をくわえさせ、とつとつ飲ませることに成功したのだった。かくてこの子猫は命拾いした。見るからに茄子のような、艶のある黒色だったので、三男坊が「ナスビ」と名付けたのだった。

ナスビは成長するにしたがって、長く柔らかな毛並みになり、両頬や耳にグレーの長い毛が張り出すように生えてきた。雄猫で、獣医さんにペルシャの血が入っているとされた。性格は人懐っこく、誰にでも抱かれて爪を出すことは殆どない。魚より肉の好きなどころも西洋の遺伝子だろつと思われた。

年も明けた頃、庭先にナスビそっくりの顔をした狐色の猫がいた。可哀相に野良猫で、やつれていたが品のよい顔たちで、何らかの理由で捨てられたのだらう。

私はそれがナスビの親だと確信した。ナスビの食べ残しの餌を靴脱ぎの石の上に出してやると、一日二回くらい来るようになったが、決して上がって盗み食いをするようなことは無かった。

やがてその猫はお腹が大きくなって、餌を貰いにくる回数も多くなった。私たちの転居の日も近づいて、東京に残る子供たちの引越しが始まった。そんなある日、外付けの階段のある二階の、ベランダに置いてあったダンボール箱の中に、その野良さんが子猫を生んでいた。覗くと黒猫が二匹お乳を吸っている。その横に狐色のが一匹反対の方を向いてミーンミーンしている。私は手近にあった布団叩きの先で、そつとその猫の向きを変えてやった。

荷造りなど人の出入りが多くなり、いつか親猫は子猫を連れて庭の隅に移動していた。ある雨上がりの朝、勝手口に鼠が死んでいる。よく見るとあの狐色の子猫である。つまみ上げると目を開けた。忙しい中であつたが、獣医さん迄連れて行つた。若い女性の獣医さんは、

「大丈夫元気になりますよ。お忙しい間あずかってあ

げますよ」

と言つた。実は貰い先を見つけてほしかったのだが、何故か切り出せなかつた。

そんな訳で、ナスビは航空会社のケージに入れ、その子猫は私のズボンのポケットに忍ばせてチェックを通り、空路鹿児島までやつて来たのだつた。

空港のケージの中のナスビは、すっかり奮えていて、鹿児島に着いても震えが止まらず、うずくまつたまままで半日が過ぎた。結局転居して第一にしたことは川内の獣医さんまでナスビを連れて行き、鎮静剤を打つてもらつたことだつた。それで元気になつたのはいいが、今度は縁の下にもぐり込んで、いくら呼んでも出て来ない。心配した娘が人相ならぬ猫相の絵を描いたウォンテッドのポスターを仕々に貼つて歩く始末となつた。猫は家に付くというから、家を探しに出て迷子になっているかもしれないと思つたのだ。

もう半ば諦めていた四日目の夜、夕食をとっていると、また未完の部屋の間からニャアとなきながら顔を出したのだつた。

子猫の方はアンと名付けた。大きな鼠くらいなのに

元気一杯でじつとしていない。西手で万歳をしながらナスビに飛び掛かる。ナスビが優しくなかったら、とつくに噛み殺されていただろう。ナスビは迷惑そうな顔をしながらも、適当にあしらったのだ。

冬になった。外で猫が妙な声でなきわめいている。みつともない声でどんな猫だろうと見るとそれがなんとナスビである。恋の泣き方もペルシャ語なのかもしれない。行動範囲もぐんと広がった。それからは戻る度に、喧嘩の傷の手当てと、長い毛に絡まるイノコツチの種を切り取ることになった。毛に絡まった種は団子のように手では取れないのだ。

アンちゃん、だんだん黒い縞が出てきていつか何処にでも見かける虎猫になってしまった。しかしなかなかの器量良しではある。雌なので早春のある日、避妊手術を受けさせた。生後八ヶ月だったが、それが少し早かったのかも知れない。その後しばらくして、癩癩を起すようになり、薬を切らすことが出来なくなってしまう。

麻酔薬の加減だったと獣医さんは言つが、さりとて治療などしては下さらない。元気で何にでもじゃれ

駆け巡っていたのが、薬で呆然と座ったまま一日を過ごすようになった。様子をみながら薬を少しずつ薄めてはいるが完全に飲まさないとい日目くらいには癩癩を起こしてしまう。

それは突然やってくる。椅子やベッドから転がり落ちると、ドンドンと頭を床に打ちつけるように痙攣を始める。シワツと尿がこぼれ出る。口には細かい泡を吹き出し、目はうつろになる。それは三分ほどで納まるのだがその間は手の施し様がない。

薬でおとなしくなった分、甘えん坊になった。私がワープロを打ち始めると、必ず膝に乗って来る。ひとしきり喉を鳴らしながら自分の前足をしゃぶったりする。夜は寝ている私の頬をそととつつく。布団を持ち上げてやると滑り込んできて、くるりと回れ右をして私の腕を枕にして眠る。大食漢で雑食のナスビに比べ、アンは夫の与える猫食を少量食べるだけだ。しかし運動不足でいつしか太ってずっしりと重くなった。

この対照的な二匹の猫の話が、今や夫と私の共通の楽しみなのである。

(平成8年10月)